研究資料

2017年韓国における体育・保健体育科教育の現状

佐藤　豊[1)]　青木　哲也[2)]　吉野　聡[3)]　本多壮太郎[4)]　木原　慎介[5)]
清田　美紀[6)]　佐藤　若[7)]　岩﨑　敬[8)]　座安可那子[9)]

Yutaka Sato[1], Tetsuya Aoki[2], Satoshi Yoshino[3], Sotaro Honda[4], Shinsuke Kihara[5], Miki Seida[6]
Waka Sato[7], Takashi Iwasaki[8] and Kanako Zayasu[9] : Korean Courses of Study, Research into PE classes, Comparison between Japan and Korea.

Abstract : This Study aimed to understand the current status of health and physical education in Korea through visiting Chung-Ang University in Seoul, and an elementary schook, a junior high school and high school arounf Seoul in March 2007. Some of the findings based on our fieldwork are as follows.

① Differences in lessons based on the structures of the Courses of Study between Japan and Korea

All of the schools visited allocated the numbers of lessons based on their own school conditions. This means that the Courses of Study is considered as reference guideline in Korea as seen the Western countries. Looking at differences of educational systems and methodologies, PE lessons were taught in co-education. PE in the primary school was taught by specialized PE teacher in the 4th grade and above. Afternoon club activities were introduced at all of the schools.

Looking at teachers in the schools, they were positive to develop quality and abilities of their teaching. Actual teachings were, however, teacher-centered. It is thought that they would need to work on creating opportunities to develop students' abilities of thinking and for students to learn from each other.

② The focal points of the revised Courses of Study in 2015

As seen in some key-words such as 'Key-Concept', 'Generalized Knowledge' and 'Function' in the revised Courses of Study, movement to embody their original approaches for developing quality and abilities of students seems to has accelerated while being influenced by the concept of 'Key-Competencies' by De-Se-Co (2003). The same change is seen in the revision of the Japanese Course of Study in 2017 and a commonality in national standard was confirmed between Japan and Korea.

③ Implementation status of PE lessons based on the Courses of Study in Korea

Through observing PE classes at the schools, it was not possible to confirm concrete changes based on 'Key-Concept', 'Generalized Knowledge' and 'Function' and the paradigm shift from sport skill-based curriculum in the revisions in 2007 and 2011 to life skill based-curriculum. Although life skill-based curriculum seems to have been accepted among the field of education, actual PE lessons were still taught by sport skill based during the visit. Follow-up research based on school fieldwork will be needed to examine effects of the 2015 revised Course of Study in Korea

Key words : korean courses of study, research into pe classes, comparison between japan and korea.
キーワード：韓国学習指導要領(教育課程)，体育授業研究，日韓比較

1) 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部
2) 福岡教育大学教育学部
3) 茨城大学教育学部
4) 福岡教育大学大学院教育学研究科
5) 東京国際大学人間社会学部
6) 東広島市教育委員会
7) 山形県立山形中央高等学校
8) 日田市立有田小学校
9) 宮古島市立平中学校

1. Faculty of Culture and Sport Policy,Toin University of Yokohama
2. University of Teacher Education Fukuoka, Faculty of Education
3. College of Education, Ibaraki University
4. University of Teacher Education Fukuoka, Division of Academic Research in Education
5. Tokyo International University, Human and Social Sciences
6. Higashi-Hiroshima City Board of Education
7. Yamagata Prefectural Yamagata Chuo High School
8. Hita Municipal Arita Elementary School
9. Miyakojima Municipal Taira Junior High School

1. 緒　言

OECD, De-Se-Co(2003)[注1)]のキーコンピテンシーをはじめとする資質・能力論の影響を受けたナショナル・スタンダード等の論議が諸外国でも活発になされている.

欧米諸国のみならず，東アジア各国においてもその傾向は顕著であり，日本の教師養成，現職教員のための研修システムやプログラムの開発を目指す課題研究を進めていく上で，近隣諸国の動向も視野に入れながら検討していくことは有用であると考えている.

このような認識に基づき，筆者らはこれまで，海外教育関係者との授業実践者間交流を図り，台湾及び韓国の小中高やオハイオ州立大学，台湾師範大学，韓国中央大学校を訪問し，体育・保健体育の授業の情報収集を行ってきた.

本報告では韓国に焦点を置き，同国における初等中等教育の体育・保健体育における教育課程及び訪問調査の分析から，課題研究のテーマに迫る上での示唆を得ることを目的とした.

2. 韓国の学習指導要領（教育課程）の分析

2-1. 韓国の学習指導要領（教育課程）の現状

まず，韓国の現状については，「世界の体育の危機を共有するアジアの学習指導要領の変化と日本の課題」佐藤ほか（2015）を手かがりに訪韓前の韓国体育科・保健体育の現状を確認したい.

体育の授業時数は，第3学年～第6学年は，各102単位時間（週3回）であり，日本の中学校にあたる第7～第9学年では第7，第8学年は102単位時間（週3回），第9学年は68単位時間（週に2回），日本の高等学校にあたる第10～第12学年では，6つの学期で10単位配当（週に2回）である.

また，2012年に政府は，全ての中学校において週に1回もしくは2回の課外活動としてののスポーツクラブ活動（50分／1単位時間程度）の導入を決定している．これは，身体活動量の増加が校内暴力の縮小につながると考えたことによるものである．その政策により，韓国における全ての中学校では，身体の活動の時間を授業で3回（50分），放課後に1回（50分）の合計4回行うことができるようになっている.

2-2. 2011年度改訂学習指導要領の要点

2011年改訂のカリキュラムは，大きく２つの要素から成り立っている．1つは，第3学年から第9学年対象の履修カリキュラム，もう一つが，第10学年から第12学年の選択カリキュラムである．これらの2つの異なるカリキュラム編成により，第3学年から第9学年の体育はそのまま「体育」，一方で，第10学年から第12学年の体育は，「エクササイズと健康的ライフ」「スポーツ文化」，「スポーツ科学」といった3つの選択コースとして提供されている.

体育科教育課程は，次の6つの構成要素で構成されている.

①The vision of the educated person(教育を受けた人についてのビジョン)
② Goals of school levels(校種レベルごとの到達目標)
③ Goals of physical education(体育の到達目標)
④Content system and standards of physical education(体育の内容構成と指導内容)
⑤Teaching & learning of physical education（体育における指導と学習）
⑥ Evaluation of physical education(体育の学習評価)

一般的に，体育を含むすべての教科は，ここに示すのと同様の内容構成がされており，①と②の2つの要素は共通で示される要素であり，すべての教科に含まれている．③ Goals of physical education（体育の到達目標）は，physically educated personであり，体育の教育を受けたものとは，様々な身体活動への経験を通して身体活動の価値，創造性，特性について（の価値を）内在化し実践できる人である．すなわち，体育の教育を受けたものは，身体活動への参加の一方で，健康，フィットネス，スポーツマンシップ，チームワーク，創造的・論理的思考スキル，身体文化への認識を備えたものであり，また，自身の人生を活動的に切り拓いていくとともに健全な社会や国家に貢献する能力を備えているということである.

具体的には，① Healthy objective（健康に関する目標），② Challenge objective(挑戦に関する目標)，③ Competitive objective（競争に関する目標），④ Expressive objective（表現に関する目標），⑤ Leisure objective（レジャーに関する目標）の5つの価値として示されているが，Jeong氏の説明によれば，身体活動の5つの価値の中で，「挑戦」「競争」「表現」の3つは以前より伝統的，内在的価値と捉えてきたことに加え，「健康」「レジャー」については現代における教育的重要性を増加させる実践的，外在的価値を備えるものとして捉えているとしている．④Content system and standards of physical education（体育の内容構成と指導内容）は，1つか２つの身体活動（日本の体育の運動種目に相当）を用いて各内容領域で教えられる内容標準により構成されている．それぞれの内容は（a）（b）（c）に示されているように連続性を含む３つのサブ的な内容領域を備えている.

2-3. 2007年及び2011年改訂における分析

佐藤ほか（2015）によれば，Jeong氏は2007年及び2011年の改訂によって，体育学習にパラダイムシフトが図られたと結論づけている．すなわち，それまでの技能を中核としたスポーツスキル・ベースからライフスキル・ベースへの枠組みシフトが図られた重要性への指摘である.

それまでの教育課程の内容構造は，単にスポーツや運動により分類されていた．2000年の第７次改訂教育課程（体育）の場合は，器械運動，陸上，水泳，個人及びチームスポーツ，フィットネス，体育理論，健康といった8つの領域で構成されていた.

最初の6つの領域において，理論や健康に関する内容が含まれていないということが挙げられ，この提案を改善すべく2007年と2011年の改訂では，5つの身体活動の価値といった内容構想が導入された．例えば，挑戦に関する活動におけるホームチャレンジのところでは，歴史，科学的原理，ゲームの方向やスキルスポーツへの認識強化，自身といった要素が教えられることとなっており，指導の方向性はこれらを全て統合するものとなった．

2-4．実地調査の分析の視点の検討

2007年及び2011年改訂に見る思想の変化で押さえておきたい点は，日本との内容構成の違いである．韓国では，領域の種目配列をライフスキル・ベースと捉え，physically educated personという目標概念を提示した上で5つの具体的目標を示した．日本の体育では，運動種目を共通としつつ，技能，態度，知識，思考・判断という具体的な指導内容を示した上で体育理論及び保健を示している．また，スポーツ固有の歴史や特性を領域の知識の指導内容として提示し，様々なスポーツを取り組む上で共通する知識の学習と種目の特性や健康･安全に関する内容は，運動領域で指導するよう整理している．両国の教育課程における内容構成の違いが教師の指導に及ぼすのか，実地調査から調べることとした．また，韓国中央大学における情報交換では2015年度の改訂の概要を調査し，改訂のポイントを確認する．

以上の結果により，本研究における実地調査の分析の視点は次のように設定した．

①学習指導要領（韓国における教育課程）の構成からみた日本と韓国の授業の違いについて
・学習指導要領の準拠性
・システムや方法論の差違
・教師の課題や授業への意識
②2015年改訂における主な要点

なお，笹川スポーツ財団が韓国教育課程の翻訳版[注2)]を公開しており，これらも事前の参考資料とし現地調査を行った．

3．実施調査の概要

3-1．訪問日

2017年3月13日～15日

3-2．訪問者

本調査は，「教師養成，現職教員の協働によるアクション・ラーニング研修プログラムの開発」にかかわる共同研究者及び研究協力者，学生，計12名によるものである．内訳は，大学関係者5名，教育委員会指導主事1名，小学校教諭1名，中学校教諭1名，高等学校1名，大学院生3名となっており，多様な立場からの視点からの分析とした．

3-3．訪問校

訪問した学校は，文徳（Moondeok）小学校（문덕초교），ハヌル（Hanwool）中学校（한울중학교），亀岩（Gu-am）高等学校（구암고교），韓国中央（Chung-Ang）大学（중앙대학교）の小学校から大学までの４校であり，表1のスケジュールで調査を行った．訪問した小･中･高等学校は，韓国の平均的な学校である．

3-3．事例1

3-3-1．基本情報

・視察先：文徳（Moondeok）小学校
・記録担当：A小学校教諭，B指導主事
・訪問日時：2017年3月14日（火）　10:00 ～11:45
・学校側説明者：ソン・ソン・シム校長　キム・ソ・ジョン教諭（教務部）ハン・ジェオンさん（韓国中央大学研究生）
・学校概要

1993年に設立．教員数は40名．全校児童は600名，全36クラス．1クラス約20名で編成されている．学校の教育方針として，人としての生き方，進路保障を大切にしており，主にはキャリア教育を推進している．

体育の授業に関しては，現在は韓国中央大学との共同研究は行っていないが，研究機関と連携しながら充実を図っている．体育専科教員が中心となり，体力向上にも力を入れている．週当たり４時間の体育的活動のうち，２時間を体育の授業に当てており，1～3年生は担任の教員が，4～6年は体育専科教員が授業を行っている．

表１　日程及び訪問校

日程 Date	Schedule
3月13日（月） March 13 (Mon)	AM　各自 PM　ワークショップ準備、役割分担等
3月14日（火） March 14 (Tue)	10:20　文徳小学校 Moondeok School 14:10　亀岩高等学校 Gu-am High School 16:30　韓国中央大学 Chung-Ang University 18:30　意見交換
3月15日（水） March 15 (Wed)	AM　ハヌル中学校 Hanwool Middle School PM　帰国

3-3-2. 体育授業の実際

・体育の授業について

対象：小学校6年生　19名　　場所：体育館

授業時間：10:50 ～11:30(40分間)

授業者：ブン・ソンヨン教諭（教職歴15年，体育専科教員）

・授業の概要

本時は，全７時間のうちの第3時．集団で行うゲームの中で，人の動きに対応してタイミングよく動いたり，すばやく身をかわしたりするなどの敏捷性を高めることをねらいとした授業内容であった．ゲームを行うためのルールについては，最低限のルールを教師が子供に提示し，ゲームを行いながら，必要となるルールを付け加えていた．

・授業のながれや様子

○整列，あいさつ，本時の授業の説明

○準備運動

○ゲーム①

2チームに分かれ，自チームの色の札が増えるよう，すばやく動いてひっくり返すゲーム．同じ形態のゲームを3回実施．

１回目は，「相手をたたかない」という安全に関するルールが，教師から提示された．ゲームでは，自分の周りにある札を繰り返し，返す姿が見られ，子供たちの動きが停滞しているように感じた．2回目のゲームでは，「ひざをつかない」というルールが追加された．

○ゲーム②

腰にぶら下げたたすきを取られないように身を翻しながら，相手のたすきを取るゲーム．このゲームでも，最初のルールは，「たすきを取られたら終わり」というルールについてのみ，教師から提示された．

「ゲーム－振り返り－ゲーム」という展開であったが，子供たちからの意見は特になかった．子供たちの全体の動きを見て，教師が気付いたことを指示するという教師主導の授業展開であった．

○ゲーム③

中心に置かれたかごの中にあるバドミントンのシャトルを周りの輪の中に一つずつ，素早く移動させる速さを競い合うゲーム．周囲で見ている子供たちは，自分のチームの仲間に励ましの声をかけていた．

○まとめ

本時で高めた動き（敏捷性）は，バドミントンなどの運動につながる動きであることを確認して終了となった．

3-3-3. 主な質疑応答の内容

Q1: 体育専科教員は，どの学校にも配置されているのか．

A1: ソウル市内の学校では，各学校に２名配置されている．

3-3-4. 記録者の感想・気付き等

・身に付けさせたい力を明確にし，そのためにどのような活動を仕組んだのか，指導の意図が分かる授業であった．一方で，体育の目標との関連が見えにくく，指導者の教育課程の内容理解という面では，十分ではないように感じた．

・体育館は教室と同じフロアにあり，狭い中で，工夫しながら授業が行われていた．運動する場所をいかに確保するかが，課題であるとのことであった．

・教師の指導性が発揮されており，活動している子供たちに対して，一つ一つ丁寧な言葉がけがされていた．

一方で，教師主導で授業が展開されるため，子供たちが活動を工夫したり，ルールを改善したりするなどの思考場面は，この授業の中でほとんど見られなかった．体育の到達目標である人間形成へとこの授業がどのようにつながっているのか，本時の授業の中だけでは見取ることが難しかった．

・体育授業時の子供たちの活動の様子を見ていると，運動を積極的に行おうとする子供と，そうでない子供との二極化の状況が見られ，体力・運動能力の状況については，日本と同じような課題があると感じた．

・韓国の体育のナショナルカリキュラム（教育課程）に関しては，従前は，器械運動や陸上など，スポーツ（種目）ベースで内容が分類されていたものが，5つの身体活動の価値ベースによる内容構成へと変更され，地域や学校の実情に応じて指導が行えるよう，教師の裁量が認められているということである．日本では，学習指導要領により，各学校で教育課程を編成する際の基準が定められており，一定の教育の水準が保たれている．また学習指導要領解説には，指導内容が例示され，単元構成や授業展開を構想する際には，示されている内容をもとにし，授業を行っている．韓国のように，目標は示すが，具体の教育課程や内容の編成を教師の裁量に任されるというのは，一人一人の教師の創意工夫を生かした授業実践が実現できるが，指導内容にばらつきが生じ，教育の質を一定に保障するという意味では，困難な面もあるのではないかと感じた．また，教師自身の高い資質・能力を求められていると感じた．

3-4. 事例2 中学校

3-4-1. 基本情報

・視察先：ハヌル中学校（Hanwool Middle School）

・訪問日時：2017年3月15日（水）　9:00 ～11:15

・記録担当：E中学校教諭，F大学准教授

・訪問先説明者：パク・スン シック校長，シン・フィ グック教頭，授業者：ソル・チュン ソク教諭

・学校概要

ソウル特別市衿川区に位置するハヌル中学校は，1971年に創設され，2016年からは禿山洞（トクサンドン）に建てられた新校舎に移動している．全校生徒の数は664人（各学級24～25人，3学年で27学級，各学年9学級）である．ソウルでは各学級30 ～37人の学校もある中，ハヌル中学校は比較的に少ない生徒数となっている．体育科教員は5人が配置されている．

学校の特徴として「改革（Revolution）」を掲げている．教員の指導レベルを上げるとともに，全ての生徒に思考したこ

とを表現させる機会を大切にし，生徒のライフスキルを高めることを目標としていることであった．実践にあたっては，日本を含む海外との共同研究を基にして作成された「Talk」という教本が活用されている．

3-4-2．体育授業の実際

・体育の授業について

対象：中学校2年生，1クラス25名で男女共修．必修授業．

場所：体育館

授業時間 :9:30 ～10:10（15時間中の5時間目）

授業者：ソル・チュン ソク教諭

・授業の概要

授業は第2学年を対象とした「チュックボール(Tchoukball)」の授業であった．チュックボールとはコートのエンドライン上に置かれたネットにボールをシュートするハンドボール形式のスポーツである．単元は15時間で構成されており，「ディフェンスをかわしてシュートができる」という単元目標のもと，この日は第5時間目の授業が予定されていた(表2, 表3)．

本時の授業目標は，「多様な方向からシュートができる」「多様な方向からシュートしたボールを防御することができる」「チュックボールのルールを理解し，競技ができる」であり，ソル・チュン ソク教諭曰く，5時間目ではあるが，学習の進度は遅れがちで，ゲームは予定されているがどれくらいできるか心配なところもあるとのことであった．

授業は，1単位時間40分で構成されている．単元の前半ということもあり，教師が主となり授業を進めていた．授業の開始前から指導者は，体育館のフロアに本時で使用するカラーコーンを設置し，生徒を迎える準備を行っていた．体育館は，日本の体育館と比べると片面程度の広さで授業を行っていた．また，1学級生徒数は男女共習で25名であった．授業での服装は，全員長袖，長ズボンの学校指定と思われるジャージを着用していた．

挨拶後は，全員で2列になりランニング後，教師が号令をかけ準備運動を実施した．準備運動は，本時で必要な筋肉や骨を動かすストレッチを中心であった．その後，3つのグループに分かれ，一人ずつコーンの外から版にむかってチェックボールを当て，自分で投げたボールをキャッチする活動となった．その間，指導者は，各グループに対して巡回指導をしながら一人一人に声をかけていた．

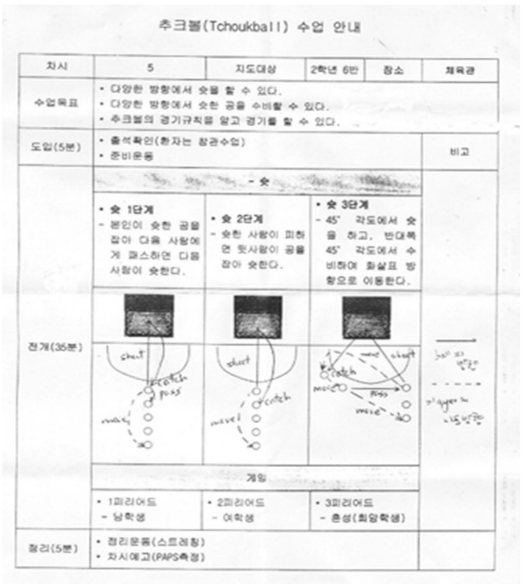
次は，投げたチェックボールを後に並んでいた人がキャッチする活動へ切り替わったが，ただ板に狙って当てるだけで精一杯な生徒や，次の人がとりやすいように狙って投げることができる生徒など運動技能レベルなどは様々であった．

さらに同じ練習場所で，1列に並んで取り組んでいた練習から二カ所に分かれた．左側にいる人が右側にいる人へパスを回し，左側の人がキャッチし，キャッチした人が版に向かって投げる．また，投げて跳ね返ってきたボールを右側にいた人がキャッチして後ろに並んでいた次の人へ渡しながら活動を行っていた．

3つの練習メニューの後は，女子対女子，女子対男子でゲームにチャレンジした．ゲーム中は，指導者がゲームの中に入り，実践させながら本時の目標の一つでもある「チュックボールのルールを理解し，競技ができる．」ことを意識させた取り組みを行っていた．

授業では，グループ同士で会話をするような場面も時折みられた．ゲームのプレイの中で1つ1つ丁寧にルールを確認させながら，子どもたちの意欲を引き出せるような声かけを行っていた．ルールの理解とともに，生徒達は声を出しながら反応をしていた．

表２　チュックボール指導案（5 時間目 /15）



추크볼(Tchoukball) 수업 안내

차시	5	지도대상	2학년 6반	장소	체육관
수업목표	• 다양한 방향에서 슛을 할 수 있다. • 다양한 방향에서 슛한 공을 수비할 수 있다. • 추크볼의 경기규칙을 알고 경기를 할 수 있다.				
도입(5분)	• 출석확인(환자는 참관수업) • 준비운동				비고
전개(35분)	- 슛				
	• 슛 1단계 - 본인이 슛한 공을 잡아 다음 사람에게 패스하면 다음 사람이 슛한다.	• 슛 2단계 - 슛한 사람이 피하면 뒷사람이 공을 잡아 슛한다.	• 슛 3단계 - 45° 각도에서 슛을 하고, 반대쪽 45° 각도에서 수비하여 화살표 방향으로 이동한다.		
	게임				
	• 1피리어드 - 남학생	• 2피리어드 - 여학생	• 3피리어드 - 혼성(희망학생)		
정리(5분)	• 정리운동(스트레칭) • 차시예고(PAPS측정)				

表３　チュックボール指導案（日本語訳）

本時	5	指導対象	2 年 6 組	場所	体育館
授業目標	・多様な方向からシュートができる。 ・多様な方向からシュートしたボールを防御することができる。 ・Tchoukball のルールを理解し，競技ができる。				
導入 （5 分）	・出席確認（ケガをしている人は見学） ・準備運動				備考
展開 （35 分）	シュート				
	・シュート第 1 段階 本人がシュートしたボールを取り，次の人にパスしたら次の人がシュートする。	・シュート 2 段階 シュートした人が下がったら，次の人がボールを取りシュートする。	・シュート 3 段階 45 度からシュートし，反対側 45 度から守備をしながら矢印方向に移動する。		
	ゲーム				
	・1 ピリオド -男子生徒	・2 ピリオド -女子生徒	・3 ピリオド -混合（希望学生）		
整理 （5 分）	・整理運動（ストレッチ） ・次回予告（PAPS【学生健康体力評価制】測定）				

3-4-3. 主な質疑応答の内容

Q1: 前回の韓国訪問した際の小学校では，ICTの活用が進んでいる実践が見られたが，貴校あるいは，域内での研究会等の取り組みの様子は?

A1: 体育学習での活用は本校ではまださほど進んでいない.

Q1: 中学校ではどのような課題があるか.

A1: 生活の中にどのように運動を取り入れ実践していくかということが課題となっている.

3-4-4. 感想・気付き等

・訪問校での特徴は，少ない生徒数で授業が展開されていたことである.

・運動に対して苦手意識が強いと思われる生徒や運動経験の少ないと思われる生徒が散見された．この理由として，系統的な学習内容の積み上げの課題が原因であるのか，生活の中での運動実践の少なさが原因なのか，あるいは別の理由があるのか確認を取る必要性を感じた.

・運動が苦手と思われる生徒が多いが，指導者側の指示に対して機敏に動き活動の切り替えを行っていた．また，沢山の日本の先生方の中で授業を受けていたにもかかわらず，韓国の中学生は各活動に対して一人一人が集中して取り組んでいた.

・試合で起こりえる状況を想定して段階的な活動に取り組ませることで，運動の苦手とする生徒に対しての技能練習の機会を作り，生徒が無理なくチェックボールの楽しさやゲームにつなげられるかという工夫が見られた.

・年間指導計画や単元計画については資料を得られなかったが，本時のねらいの明確化や学習指導案の作成などは日本と同様の指導の工夫があると思われた.

3-5. 事例3

3-5-1. 基本情報

・視察先：亀岩高等学校（Gu-am High School）

・記録担当　C高校教諭，D大学院教授）

・訪問日時：2017年3月14日（水）　14：20 ～16：30

・訪問先説明者：パク校長，インチーション教頭，キム教諭（授業者）

・学校概要

亀岩高等学校は，ソウル市内の中心部に位置し，学校の前には，大規模のマンション・アパート群があり，岩山の小高い丘の上にある普通科の公立学校であった．開校から6年目を迎える新設校であり，全校生徒数は約730名，学級数は28学級（8クラス，8クラス，11クラス他，特別支援学級1クラス）である.

3月初めから新学期が開始しており，体育的な取組の特徴として，放課後のクラブによる女子のスポーツ参画を工夫している点がある．クラブは全員対象とし，週1回行っている．運動施設については，狭い状況にあり，体育館も狭く，バスケットコート1面ほどのスペースであり，他のスペースを利用して卓球を実施している.

体育は週に2時間，体育科教員は3名，体育授業は2時間×3学年で行っており，保健については別に専門の指導者がいる．スポーツ２時間，保健・保健・安全教育１時間，クラブ，合わせて４時間を身体活動にあてている．1クラス30名程度で授業を行っており，1年は，男子4クラス，女子3クラスで編成．2年，3年は，男女共修のクラスで編成．学年生徒の希望を聞いて，基本的な実施方法を決めている.

3-5-2. 体育授業の実際

・体育の授業について

対象：高等学校3年生．普通科，1クラス30名で男女共修．必修授業.

場所：教室・廊下を利用した卓球場（卓球台8セットの内，マシン付き1台，玉受けネット付き1台）空き教室を利用し，卓球台を新規に購入して入れた状況で実施.

授業時間：15：10 ～16：00(8時間中の3時間目)

授業者：キム教諭（教職歴　中学校15年・高等学校9年）（教諭自身は，水泳が専門）

・授業の概要

授業のねらいや背景：卓球のスキル向上をめざしている．運動場等の運動施設も狭く，教室を利用して卓球室を作った．また，卓球台を購入したので授業設定をした.

授業内容としては，スマートフォンの写真や動画を見てフィードバックする構成となっており，習熟度別グループを編成し，実施している．評価については，数値化して，目標を示し，実際の評価を行う．保護者から評価の根拠を求められることが多いので，事前に生徒に対して，明確に提示している.

・授業の流れや様子

○整列，あいさつ，内容説明

○準備運動（先生の指示）

○活動1：生徒に技能レベルを確認し，3つのグループ（A，B，C）に分けてフォアストロークの練習を開始.

A：上級（マシンを利用し，マシンから打ち出されたボールを打ち返す）

B: 中級（相手から人が投げ入れたボールを打ち返す）

C:初級（仲間が自陣コートに垂直に投げ落として，弾んだボールを壁に向かって打ち込む.）

○活動２：それぞれ相手を見つけてダブルスのゲーム（11点先取）を行う

○まとめ　フォアストロークのポイントをもう一度確認して終了

3-5-3. 主な質疑応答の内容

Q1：ソウル市の運動に関わる児童生徒の現状についてどのような課題があるか.

A1：スポーツを中心に進路を考える学生と，そうでない学力を中心とした学生の二極化の状況にある.

・運動を苦手とする生徒が多く，特に女子の運動離れが課題で，どのようにして女子に運動に親しませるかを課題としている.

・幼児の運動の課題，生徒の幼稚化など，様々な教育課題がある.
・学校の体育だけでは，身体活動量が不足するため，家庭での運動プログラムにつなげることが課題となっている.
・SNSの依存の生徒も多く問題視されている.
Q2：貴校における取組として行っていることはあるか.
A2：自転車などを運動プログラムの中に取り入れている.
・運動の大会を開いてイベント化して盛り上げている.
・1日50分運動することを目標にしている.
Q3：特に喫緊の課題は?
A3：課題は女子の運動実施である．女子の運動嫌いが課題で，対策の結果，女子にやる気が出て，動くようになった．それは学校だけでなく国の課題でもあり，女子の運動活性化のための研究が始まった．女子が楽しく運動するプロジェクトとして，「ネットボール」「パスボール」「エアロバイク」「バドミントン」などがあり，女子生徒のみ参加できる大会が地方大会から全国大会までがある．以前から，国の施策として，研究校への予算配分　クラブ等へ1クラブ年間10万円，岩亀高校30万円程度の予算で使用することができる.
・楽しく，好きになることが積極的に運動に関わる子供になる．韓国の子供は，体育は基本好きである．しかし，受験熱の関係で運動が重視されていない．入試によってスポーツ・学力に関して二極化している.
Q4：ソウル市の体育科の現状は，どのような状況か.
A4：体育教師は不足している．倍率は10数倍程度である．教員の資質向上として，現職教育は，義務ではない．基本，自主研修である．ソウル市内には研修グループはある．中・高は，比較的行き来や交流があり，研究をしている．小学校の体育の研修交流は，それほどまでは無い.
Q5：選択制授業は行われていないのか?
A5：ナショナルカリキュラム（教育課程）はあるが，その中から学校の事情も考慮し，学校長の判断で決めている．改訂の方向性については，多くの教員が合意している．1～2年では主にバトミントン，フロアーボール，ネットボール，バスケットボール，フットボール，バスケットボールを12～13時間で実施している．陸上，水泳などは，ほとんど行わない（プールを保有している学校は3％程度）.
Q6：評価についてはどのように行っているか?
A6：技能を確認し，個人とチームの評価を行っている．個人はストローク40％，チーム60％で実施（ラリー回数を見るが，個人の伸びを考慮している）．意欲や態度は「生活記録」に特別に記録し，大学への資料として，有効活用される.

3-5-4．感想・気付き等

・運動やスポーツに興味関心の低い生徒の興味付けに苦心されている状況が感じられた.
・生徒の体型などを見て感じたことは，高校3年生の新年度の姿として，運動不足，軽肥満の状況が推測できる生徒が多く存在した.
・体育施設が課題であることが象徴されたように，狭いスペースの中で行われた卓球授業であった．卓球送球マシンがあったが，本来，授業用なのか，クラブ用なのか不明であった.
・これまでの運動経験はわからないが，ほとんどラケットにボールに当たらないような生徒から，カットをするような専門的な生徒まで，運動技能の幅が大きい．それを考慮してレベル別に練習課題が明確に示されていた．これは，成績評価に関して，保護者の関心が高く，説明責任を求められることが多いことが背景としてあることのことであった．一方で，教師からのポイントの視覚的な提示や，技能が身についていない生徒への個人指導，また生徒同士の教え合いなどは，あまり意識されておらずこの時間では見られなかった．教師も基本的な技能の提示のみで，技能を習得させよう，教えようとする部分は強調されていなかった．（楽しさを感じさせようとする部分を強調）
・スマートフォンでボールを打つフォームを撮影している生徒がいた．相互にプレイの後に見合っていたが，映像を使って何をどのように活用するのかなどの指示や，活用の仕方を明確に生徒に示すと，より効果的だと感じた.
・授業中，集団になじめず，活動にも参加が難しい特別な支援を必要とする生徒の姿が見られた．韓国においても，特別な支援を必要とする生徒の存在が課題となっていることが認識できた．合わせて，パラスポーツの課題も取り上げられていることが話題としてあがっていた.
・体育教師が体育や運動の現状を憂慮する意識は，共通する課題であることが分かった．子供の運動に関して，職員研修や体育に関する理解や環境などの面で，日本はより恵まれていることを感じた．体育に関する研究・研修制度は，日本は整っているので，積極的に活用や働きかけをすることが，重要であることを感じた.
・通訳者は，日本の兵庫教育大学の大学院の留学経験があり，語学堪能であった．そのような先生の姿を見る中で，様々な国の現状や実情を知ることや学びを深める研修をすることで，自身の指導に課題意識や変革をもたらすことができると感じた．また，コミュニケーションの手段として，基本的な語学は重要なものであり，これからの教師や生徒には，積極的に習得する必要を感じた.

3-6．事例4

韓国の2015年改訂教育課程／専門家インタビュー[注3)]

日本と同様に，韓国においても周期的に教育課程の改訂が行われている．2015年改訂の背景には，①将来的に重要でなく無意味な知識の学習に多くの時間を割いている，②学校教育が現実的な生活に結び付いていない，③学校教育が生徒の進路・生き方の模索に役立っていない，といった問題点が挙げられた.

それらを踏まえ，例えば科学と音楽，歴史と技術，スポーツと芸術といったように合科教科として組み合わせながら教育を展開することが大切であると考えられている．そして，将来の韓国の社会に向けては「創造性豊かな人間（People with Creativity-Convergence）」（多様な知識を包含し，新しい知識や価値を創造できる人間）の育成というビジョンが掲げられている．

2015年教育課程（以下，「2015年課程」，2011年教育課程の場合は「2011年課程」と記す．）の特徴としては，資質・能力を基盤としたカリキュラムが編成されている点である（Competency-based Curriculum）．資質・能力とは，将来の社会生活においてよりよく生きていくために必要な能力であり，「知性（Intellectual Ability）」，「人間性（Character）」，「技能（Skill）」を一体とした能力のことを指す．このような資質・能力は自然と身につくものではなく，学習によってこそ獲得されるものと考えられている．主要な資質・能力（Key Competencies）として，具体的には，①自己管理（Self-management），②情報処理（Information processing），③創造的思考（Creative thinking），④共感（Emotional sharing），⑤コミュニケーション（Communication），⑥共同体意識（Community）の6つが挙げられている．

また，2015年課程では新たに，「鍵概念（Key Concept）」，「一般化された知識（Generalized Knowledge）」，「機能（Function）」という用語が用いられるようになった．

「鍵概念」とは，教科の最も基本的な考え方や原理原則となるビックアイデア，ビッグコンセプト，キーアイデアのことをいう．「一般化された知識」とは，児童生徒が知るべき学習内容およびその学習内容の根本となる原理原則のことを指している．特に，これまでの体育では学習内容が多すぎるという指摘もある中で，例えばある一つの種目において原理原則を学ぶことで，他の種目にも応用していくことができるものと考えている．

「機能（Function）」とは，生徒が各教科で習得すべき知識を活用しながら探求する過程や思考力のことを指している．つまり，これまでの内容中心の学習ではなく，これからは学習過程を重視していくということである．サッカーの学習を例に挙げれば，これまではサッカーの歴史，構造，チームワークといった内容重視の学習をしてきたが，これからは技能向上の過程や，サッカーという素材そのものに対して理解する，思考する，分析するといったプロセスを重視していく，ということである．

2015年課程における学校種別の主な変化をみると，小学校では，1，2年生において「安全」という新たな教科が位置づけられた．この背景には，2014年に起きた旅客船セウォル号の沈没事故（韓国南部の沖合で沈没し，修学旅行中だった高校生らを含めた約300名が死亡した事故）がある．また，中学校では，試験を実施しない自由学期制（1学期制）を導入したり，「ソフトウェア（SW）」という新たな教科が導入されたりした．また，高等学校においては，一般教養コースとキャリア教育コースの2つのコースが設置され，選択できるようになった．

一方，体育における主要な資質・能力（Key Competencies）としては，「身体修練」，「身体表現」，「健康管理」，「ゲームパフォーマンス」の4つが挙げられている．領域については，小・中学校の2011年要領では「健康活動」「挑戦活動」「競争活動」「表現活動」「レジャー活動」という構成であったが，2015年要領では「健康」「挑戦」「競争」「表現」「安全」というように再構成された．さらに，資質・能力の向上という点を強調するため，すべての領域名から「活動」という表記が削除された．また，2015年要領では新たに「安全」領域が設置され（この背景にセウォル号の事故があるのは先述の通りである），従前の「レジャー」に関する内容は「健康」領域に含められることとなった．

図1（For Example, Challenge in grade 7-9）は，中学校体育の「挑戦」領域を例に，先述の「鍵概念」，「一般化された知識」，「機能」を体系化したものである．

ここでは，「鍵概念」として，①挑戦の意味，②目標設定，③心身の修練，④チャレンジ精神の4つが設定されている．また，「一般化された知識」には，①人は限界や弱点を克服するため常に自己や他者あるいは環境などに向かって挑戦すること，②目標はさまざまな課題の遂行と振り返りのプロセスを介して達成されること，③チャレンジ精神は継続的な修練と振り返りを介して養われること，の3つが設定されており，それらの具体的な内容要素として，例えば「挑戦」に関する歴史や特性，ゲームスキルと科学的な原理原則，ゲームメソッドと戦略，勇気などが含まれている．さらに，「機能」として，分析する，観察する，適用する，実験する，比較することが設定されている．

2015年課程の高等学校体育における主な変化は2つある．1つ目は，体育は必須科目として4～6学期間（2～3年間）で10単位を修得しなければならないこととなった．これは，普通高校だけでなくすべての高等学校に適用される．これに伴い，高等学校における教員採用数は教科別にみると体育が最も多くなっている．2つ目は，2011年課程では「運動と健康的な生活」「スポーツ文化」「スポーツ科学」の3つのコースが示されていたが，2015年課程では，一般教養コースにおける「体育」「運動と健康」，キャリア教育コースにおける「スポーツと生活」「体育の探求」の合計4つのコースが示されることとなった．

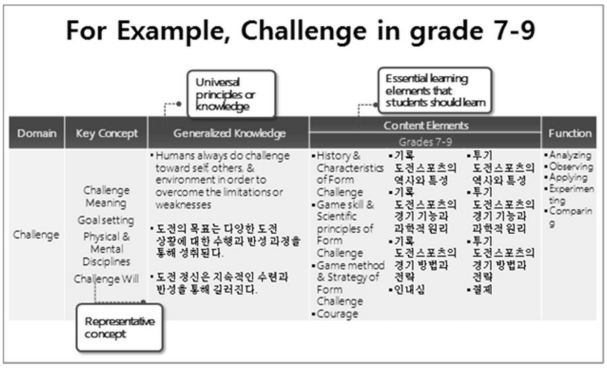


図1　For Example, Challenge in　grade 7-9

4.　本研究のまとめと今後の課題

4-1.　本調査の総括

これらの視点を中心に，参加した共同研究者らと再度，本視察の総括について検討を行った．参加者である大学関係者，教育委員会関係者，学校現場関係者の多様な立場から見た考察を記す．

・日韓の学習指導要領（教育課程）は，ともに資質・能力ベースでの内容の改訂，再構成が行われている．学習指導要領の準拠性については，授業の観察においては，これまで他の種目で学習させた/してきたこと（原理原則）を，現在学習している種目でどのように応用させよう/しようとしているかに着目してみたが，今回の調査ではそれを把握することはできなかった．

・授業前後での担当教員とのディスカッションや配布された指導案の内容からは，この方法論や具体的な実践方法について未だ模索中であるとの印象を受けた．

・学習指導要領の準拠性について，今回の視察だけではその程度について把握することができなかった．年間指導計画や単元計画といった授業プランについての情報も踏まえ，両者を比較することが有効であると考える．システムや方法論について，集合，準備運動，説明，活動（練習やゲーム），振り返りといった授業の大まかな流れについては差違がなかった．

しかし，学習形態や教材・教具の工夫に関しては不足していると感じた．例えば，グループ学習等での話し合いや教え合いなどは見られず，教師主導型の一斉学習形態がほとんどであった．また，板書，学習カード，学習資料の活用などは見られなかった．これらの点に関しては，学習指導要領（韓国教育課程）の理念から考えると日本のシステムや方法論における在り方の方がより資質・能力の育成に適しているのではないか．あわせて，学習環境面についても，視察先では施設等の整備に課題が見られた．

これらに関連して，教師の課題や授業への意識についても，発問や演示，生徒の主体性を引き出すこと，教師と生徒の双方向の授業展開，支援を要する生徒への手立てなどに関する指導テクニックは課題であると感じられる．そのためにも，教師教育に関して教員養成や教員研修の充実が求められるであろう．

・資質・能力ベースのカリキュラム，スポーツスキル・ベースからライフスキル・ベース重視へのパラダイムシフト，学び方重視，学んだことをどう活用・発展させていくか，などといったポイントは，日本とかなり類似していると感じた．「安全」の新設に関しては，プールの設置率や水泳学習の充実などは日本の方が大きく進んでいるため，関連する情報提供は有意義であると考える．いずれにしても，このようなカリキュラムに関しても，両国が継続的に実態調査や情報交換をしながら協同的に研究を進めていく意義は非常に大きいのではないか．

・小・中・高いずれの授業からも，2015教育課程の内容理解がまだ十分図られていないのではないかという印象を受けた．これは，改訂の翌年であるため，教員に対して改訂の理念や目標・内容の理解が進んでいないためと推察される．

・学習指導要領（韓国教育課程）は，資質・能力の育成を目指しており，創造的・論理的思考スキルや身体文化への認識など健全な社会や国家に貢献する能力を育てるとされており，教員もその点についておおむね評価しいていた．しかしながら，見学した授業は，主に技能や身体能力の育成をねらいとしたものとの印象が強かった．ライフスキルスキルベースへの枠組みシフトへの転換という点ではまだこれからの取組が必要ではないか．

また，具体の授業場面において，育てるべき資質能力の育成に向かって，何を目標にどのよう授業を構想していけばよいか，ねらいや内容設定の難しさも散見された．

この点については，これから日本が直面する課題とも言え，さらに変化を見守る必要がある．

4-2.　まとめ

本調査では，2011年度教育課程に基づく小中高の授業及び2105教育課程改訂の動向調査を通して，2017年韓国における体育・保健体育科教育の現状を概観することで，本研究の主題である「アクション・ラーニング型研修プログラムの開発」に資する示唆を得ることを試みた．

本調査で明らかにしたい点は次の通りであった．

①学習指導要領（韓国教育課程）の構成からみた日本と韓国の授業の違いについて

・学習指導要領の準拠性

・システムや方法論の差違

・教師の課題や授業への意識

②2015年改訂における主な要点

③韓国の学習指導要領（教育課程）に基づく授業の実施状況

現地視察及び参加者の総括によるまとめは以下の通りである．

①学習指導要領（韓国教育課程）の構成からみた日本と韓国の授業の違い

教育課程の基準は国家レベルで示し，その基準性を踏まえて様々な学校の実情や生徒の実態に応じて学校が授業として具体化し，求められる資質・能力を育成しようとする方向性は，2009，2011年改訂における現状分析，事例5における2015年改訂の動向からみて韓国においても同様である．本事例研究の視点から表4として整理した．その中で，学習指導要領（教育課程）準拠性については，日本の学習指導要領は，法的拘束性を有するものであるという認識から学習指導要領の準拠性が高いが，韓国では，3つの訪問校ともに学校の実態に応じた時間数の配当や内容の取り上げ方がされていることからも，欧米に見られるように参考指針としての性格としての違いが確認された．

また，システムや方法論の差違を見ると，小中高とも訪問校は男女共習で実施されており，小学校では４年生から体育専科が指導していた．クラブ活動の導入は小中高で導入されていた．教師の課題や授業への意識の視点から見ると，資質・能

表４　訪問校における調査結果概要一覧

	日本との共通性・相違点	学習指導要領の準拠性	ヒアリングによる実施の実態	・訪問校におけるシステムや方法論の特徴	・教師の課題や授業への意識
小学校	運動習慣の二極化	第３学年～第６学年は，各102単位時間（週３回） ・5つの価値を育てる	週当たり４時間の体育的活動のうち，２時間を体育の授業に当てている	・市内体育専科教員各校２名 ・技能獲得を中心とした教師主導型	・施設面の狭さ ・5つの価値の具体化に教師の力量が重要
中学校	指導案提示、ゲームの中核となる動きへの着目	各102単位時間（週３回） 週に１回もしくは２回の課外活動としてのスポーツクラブ活動(50分／1単位時間程度)の導入	・技能以外の目標の具体化は指導案から確認できず ・1単位時間40分	・全教科でライフスキル重視 ・25名(男女共習) (ソウル市内は30～37) ・技能を獲得とした教師主導型	・施設面の狭さ ・運動経験、技能の格差
高等学校	女子の運動離れ 幼児期からの運動機会の減少 スポーツと学力の二極化	・「運動と健康的な生活」「スポーツ文化」「スポーツ科学」 ・６つの学期で10単位配当（週に２回）	スポーツ２時間，保健・安全教育１時間，クラブ，合わせて４時間の身体活動 指導内容は、学校の事情も考慮し，学校長の判断 学習評価は、個人40％チーム60％で評価，意欲や態度は「生活記録」に特別に記録し，大学への資料	・３０名(男女共習) ・スキル向上がねらい ・家庭での運動プログラムにつなげること ・技能段階別の学習課題の提示	運動場等の運動施設が狭い 1日50分運動すること クラブは全員対象とし，週１回必修
概要	運動習慣の二極化・女子の運動場慣れは共通 韓国の高校では学力と運動のいずれかの選択	日本においては、学習指導要領の準拠性が高いが、学校の実態に応じた時間数数や単位時間の配当がされている。また、5つの価値の目標の具体化が確認できなかった。		・小中高とも訪問校は男女共習 ・小学校４年生から体育専科が指導 ・クラブ活動の導入は小中高で導入	資質・能力の育成は好意的であるが、実態は技能中心とした教師主導型 ・施設面での課題が小中高で見られる。

力の育成の方向性は好意的であるが，実際の授業は教師主導型の授業であり，資質・能力の育成に向けて，思考力や判断力を育む場面や児童・生徒間の学び合いの場面には課題が見られた．あわせて，施設面の狭さなどの課題が小中高で見られた．

②韓国2015年改訂教育課程の主な要点は，全体の方向性として,「鍵概念(Key Concept)」,「一般化された知識(Generalized Knowledge)」,「機能 (Function)」などの用語に見られるように，OECD, De-Se-Co(2003)のキーコンピテンシーの影響を受けつつ，独自の資質・能力育成のアプローチを具体化していく動きが加速していると言える．日本の2017年学習指導要領改訂でも同様の変化が見られることから，資質・能力ベースでのナショナル・スタンダードの共通性が確認された．

③韓国の学習指導要領(教育課程)に基づく授業の実施状況

2007, 2011改訂のスポーツスキル・ベースからライフスキル・ベース重視へのパラダイムシフト及び2015年改訂の「鍵概念」,「一般化された知識」,「機能」の授業での具体的な変化については，現地の授業視察からは十分な確認ができなかった．システムや方法論の視点からは，小中高とも訪問校は男女共習であり多様化は進んでいる．ライフスキル・ベースの教育課程は好意的に受け止めているが授業の実態は，技能中心とした教師主導型で展開されており，学校現場での実践からは今後の継続調査の必要性が認められた．

本研究の主題である「アクション・ラーニング型研修プログラムの開発」の視点からみると，新しい教育課程の変更を学校現場が咀嚼し，授業実践として具体化するためには一定の期間が必要であることは日本も同様である．学習指導要領の理解を広域的に進め，学校現場の理解と実践をサポートするという点において，大学が果たすべき役割についての可能性を更に検討する必要がある．大学の具体的な役割として，教育課程の内容の効果的な伝達システムや伝達補完システムの在り方に関する研究を，韓国と共同し開発を進めることもその一つであろう．

また，内容を指導や学習の実践にどのように具体化していくのかという学校現場への情報提供機能も大切となる．さらに，そのための具体的なアイデアや実践例をどのように収集したり，共有したりするかも重要な課題となる．それらの点では，韓国における現状分析を通して，我々の課題研究において明らかにしようとする「アクション・ラーニング研修プログラム開発」の意義が改めて確認されるとともに，諸外国との比較研究等から学ぶ意義は大きいと言える．

4-3. 今後の課題

①運動機会の減少や指導内容の課題など2015年改訂の成果検証に向けてはさらに調査をする必要が認められる．

②特に，高等学校段階では，必須教科としての位置づけが復活しており，教育全体が目指す資質・能力と体育の授業の関係性をどのように具体化していくのかということについて調査をする必要性が認められる．

注

注1) OECDは，国際化と高度情報化の進行とともに多様性が増した複雑な社会に適合することが要求される能力概念を明らかにする「コンピテンシーの定義と選択」Definition and Selection of Competencies(DeSeCo) を1997年末にスタートさせ，2003年に最終報告をしている．

注2) 笹川スポーツ財団が公開している佐々木邦彦，韓国の学校体育－2009年改正教育課程と集中履修制がもたらすもの http://www.ssf.or.jp/topics/external/tabid/746/Default.

aspx (2017.9.11参照)-を事前の参考資料とした.

注3) 本インタビューは, 筆者の主催する九州･体育保健体育ネットワーク研究会と韓国中央大学の連携協定に基づき, 韓国中央大学において日韓の体育科・保健体育科学習指導要領の現状についての意見交換を行った際のJeongAe You氏による発言及び提供資料をまとめたものである.

文　献

OECD (2003), Definition and Selection of Competencies (DeSeCo).http://www.oecd.org/edu/skills-beyond-school/definitionandselectionofcompetenciesdeseco.htm(参照日：2017.9.11)

佐藤　豊･JeongAe You･Yuh-Chih Chen･森　良一(2015), 保健体育授業づくりシンポジウム　世界の体育の危機を共有する「アジアの学習指導要領の変化と日本の課題」鹿屋体育大学学術研究紀要, 52:53 -70.

佐藤　豊 (2017), 基礎研究Ｂ（15H0364）教師養成, 現職員の協働によるアクション・ラーニグ研修プロム開発成果報告書2016年台湾における教育行政及び小・中高等学校の現状. https://kyushunet.com/sns/uploads/111_20170214055851.pdf(参照日：2017.9.11)